

# D・ボンヘッファー『服従』における〈内的集中と世〉<sup>(1)</sup>

ーキリスト集中と職域の理解をめぐるー

橋 本 祐 樹

## はじめに

『服従』執筆期のボンヘッファーが「内的集中」を志向したことは知られている<sup>(2)</sup>。すなわち、ボンヘッファーは荒廃するドイツの政治状況に翻弄される教会的状况の中、教会再建の鍵を「新しい修道院気質」<sup>(3)</sup>に見出し、牧師研修所などでの実践的側面においてもこれを追求し、また『服従』における思索においてもその信仰の内的志向は徹底された。バルトの『ロマ書』に並ぶ神学的労作とも評され、今日では20世紀の神学的古典にも数えられる『服従』だが、当初にはこの『服従』の「内向する性格」に関しては「個人的敬虔への傾斜」と否定的に評価もされたし<sup>(4)</sup>、それこそ戦後、ボンヘッファー研究史の端緒においては、H. ミュラーの研究によって『服従』の内的志向は世（外）を顧みない「誤った道」と断罪され<sup>(5)</sup>、以降、『服従』におけるボンヘッファーの内的集中は研究史において1つの大きな課題となった。そして現在、ボンヘッファー研究史はミュラーの判断を基本的には退け、『服従』における内的集中が時宜にして一つの必然を持ち、これが世との関わり、教会と世との関係を無とするものではなかったことが様々な仕方で確認されている。

しかし、『服従』における内的集中が果たしてどのような意味で「教会と世との関

(1) 本稿の関連研究に、筆者による『服従』の世概念の研究がある。「D・ボンヘッファーにおける〈世〉の理解ー『服従』第Ⅱ部を中心にー」『神学研究』（第55号）、関西学院大学神学研究会、2008年、157-168頁。

(2) ボンヘッファー自身が『服従』執筆に重なる時期に内的集中の志向を語っているし（ブルーダーハウス設立の提議等）、また研究者の間でも「内的」という表現でこの時期のボンヘッファーの側面は理解されている。森野善右衛門訳出の『共に生きる生活』（新教出版社、1975年）の「あとがき」、特に135-136頁を参照。

(3) *GS III* 25. 兄カール・フリードリッヒに宛てた手紙の中でのボンヘッファーの言葉。その文脈の詳細については、E. ベートゲ著、雨宮栄一訳『ボンヘッファー伝（第3巻）』新教出版社、1974年、76-85頁を参照されたい。

(4) 『服従』に対しては発刊当初からそのような批判が提出されていたし、またボンヘッファーの実践上の取り組みに対しても一部の牧師候補生たちから初め戸惑いの声が上がっていた。ボンヘッファーの盟友ベートゲは「多くの人々は、ボンヘッファーの服従の神学の中に、キリスト者が自己ゲッター化に陥る危険性を見る」と指摘している。エーバハルト・ベートゲ、レナーテ・ベートゲ著、宮田光雄・山崎和明訳『現代キリスト教の源泉1 ディートリヒ・ボンヘッファー』新教出版社、174頁。

(5) H. Müller, *Von der Kirche zur Welt: Ein Beitrag zu der Beziehung des Wortes Gottes auf die societas in Dietrich Bonhoeffers theologischer Entwicklung*, Hamburg: Herbert Reich Evg. Verlag, 1961, pp20, 38, 197.

係を無とするものではない」のか、これまでの研究は様々な点を明らかにしたが、取り組むべき課題は未だ残されているように思われる。以降の議論を先取りして言えば、これまでの研究は『服従』に展開される内的集中の意味を主として歴史的コンテクストとの対照から明らかにしたが、『服従』に展開される思惟を主眼とした解明の余地は未だ残されているように思われるのである。

ここに、私たちは本稿の主題をなお「『服従』における〈内的集中と世〉」に見出す。『服従』に展開される内的集中の意味について、世との関わりの問題を念頭に、これまでの研究成果に抛りつつ、かつ批判的に探求したい。

## 1. 『服従』の内的集中とネガティブな〈世〉理解<sup>(6)</sup>

「『服従』における内的集中の問題」を研究史に提起し、議論を喚起したのは冒頭にもあげた H. ミュラー (Hanfried Müller, 1925-2009) である。研究史の始まりにおいて、ミュラーは内的志向を傾向する『服従』に関して、世 (外) を顧みない「誤った道」、現実からの逃避であると断罪した<sup>(7)</sup>。『服従』においてはボンヘッファーの眼前に「世」は積極的な意味では存在せず、現実から逃避するばかりにキリスト服従の思想のみが個人的敬虔の問題として内的に拡大していると見たのである。

なるほど確かに『服従』の内容はキリストに対する「わたし」ないし教会の服従の真実を問うことに集中しているし (本稿3を参照)、例えば「世」をめぐる『服従』の考察を見ると、キリスト者と世、教会と世との結びつきは徹底的に断絶せられているようにも見える。

「神と世…は互いに相反する。なぜなら世…はわれわれの心を捕らえるものであり、またわれわれの心を獲得することによって、初めてそれ…は本来あるべき姿になるからである。…それ…は神に敵対するものである。われわれは自らの心を一つのものに全き愛をもって捧げることが出来るし、ただ一人の主に寄りすがることが出来る。この愛に対立する者は、憎しみに陥る。イエスの言葉によれば、神に対しては、愛か憎しみかのどちらかがあるだけである。われわれが神を愛さないならば、その時にはわれわれは神を憎む。その中間はない。…世を愛するならば、あなたは神を憎み、神を

(6) 〈世〉をめぐる『服従』の研究史については、山崎和明の理解に学びつつ、筆者によって既に取り組まれている。詳細は注(1)の拙稿を参照。

(7) 注の(5)を参照。ミュラーの理解が事柄に即してはいなかったとしても、ミュラーが抱いたような『服従』への印象は、当時もしかすると例外的なものではなかったかもしれない。戦時中の教会の姿勢に対する反省から、戦後神学は「世に対する教会の関わり」、「教会と政治」といった主題を大きな課題としていた。その問題意識から、外見的には「内的な集中」を主として謳う『服従』を読むならば果たしてどのような印象を受けるであろうか。

愛するならば、あなたは世を憎む」(DBW4 170、一八九、傍点は引用者による)<sup>(8)</sup>。

ここに、神と世が徹底的な対立に附されていることは確かに見出される。神の愛にキリスト者が応えるところの信仰的実存においては、世の入り込む余地はここに認められない。神を愛することは世に留まり世に赴くことに結びつけられないのである。

このようなキリスト者と世との関係(断絶ないし対立)<sup>(9)</sup>を基礎付けるのは、『服従』において他でもなくキリスト理解である。「世の所与の現実に対する直接性は、仲保者にして主であられるキリストが間に入って来られたゆえに、私から奪い去られる。洗礼を受けた者は、もはや世に属さず、世に仕えず、世に屈従することはない。…世との断絶は完全なものである」(221-222、二五四、傍点は引用者による)。

「世のための教会」を主張した後期ボンヘッファー<sup>(10)</sup>の響きはここにはないようにさえ見える。『服従』において世とキリスト者との関係を基礎付けるのは主としてキリストであり、そのキリストが、世との分離をこそキリスト者に与えるのである。引用された言葉の周辺において「キリストを通して世と関わる」と述べられているにせよ、ミュラーが、そして後にはE. ファイル(Ernst Feil, 1932-)がこのような言質ではなくむしろキリスト服従の結果する「世からの断絶と分離」に注視せざるを得なかったように、『服従』全体の響き、強調点はこちらにはない。キリスト服従が結果する「世理解の全体の調子は一面的に否定的である」<sup>(11)</sup>。

「破られることのない封印によって、世から引き離されて、聖徒たちの教会は最後の救いを待ち望む。見知らぬ土地に行く封印列車のごとく、教会は世を通って行く。

(8) DBW4=Dietrich Bonhoeffer Werke Band4:Nachfolge, München: Chr.Kaiser, 1989. 引用の後に、原著に関してはアラビア数字で、邦訳文献(ボンヘッファー選集3『キリストに従う』新教出版社、1966年)に関しては漢数字で頁を指示する。尚、以降の注では上記の邦訳文献について「邦訳(1966)」あるいは「邦訳文献(1966)」と略記する。

(9) 「ボンヘッファーの世理解」をめぐる研究史における一つの焦点は「世との関係」(世と教会あるいはキリスト者との関係)理解であった。これまでのボンヘッファー研究の積み重ねにおいて、『服従』に展開される「世との関係」理解は「主としてネガティブ」であるとの総括、コンセンサスが提示されており、これは基本的に事柄に即していると言える。ただし、『服従』第Ⅱ部において、ネガティブな関係理解に留まらない重要な理解が示されていることは注意したい。『服従』第Ⅱ部の「世との関係」理解を整理、区分する研究については、本稿注(1)。

(10) E. ベートゲによる包括的な伝記研究(1967)以降、ボンヘッファー研究においてはボンヘッファーの生涯を3つの時期——神学者として研究と牧会に従事した初期(-1931)、キリスト者として教会闘争に参加していった中期(1932-1939)、そして同時代人としてヒトラー暗殺計画に関わっていった後期(1940-1945)——におおよそ区分して理解することが広く了解されており、本稿においてそれは基本的に踏襲される。

(11) 日本ボンヘッファー研究会訳『ボンヘッファーの神学—解釈学・キリスト論・この世理解』新教出版社、2001年、248頁を参照。E. Feil, *Die Theologie Dietrich Bonhoeffers: Hermeneutik-Christologie-Weltverständnis*, 4. Aufl., München: Chr. Kaiser, 1991, p.286. さらにファイルは、『服従』の世理解に対するこのような解釈から、『服従』における世界逃避の危険性、「閉鎖共同体」に陥る契機・可能性を読みとり、「このことに基づいては、なぜキリスト者が実際にこの世から逃避すべきでないかはもはや理解できない」と『服従』のアポリアを指摘している。邦訳 235、243、244 頁。本稿はファイルの研究に基本的には学びつつも、「この世に向かうボンヘッファーのキリスト服従」を見出そうとするものである。

ノアの箱舟が、洪水の中を乗り切って救われるために、『その内と外をアスファルトで塗』らなければならなかったように(創世記 6:14)、封印された教会の進みゆく道は、洪水の中をゆく箱舟の航海によく似ている」(276、三一九、傍点は引用者による)。

教会は確かに世を通して行く。しかし、それは言わば遮断された直接の関係を持たないごとくの進行であり関係であると、『服従』はそのキリスト集中に拠って確かに描いているのである。

## 2. 「1930 年代後半のドイツ」と『服従』の内的集中

しかし、果たして問題はこれが「誤った道」(ミュラー)、「孤立的な結論」(ファイル)を意味するかどうかという点である。『服従』は確かに見るところ「内向きの」キリスト服従を説き、それは世からの断絶、分離をも意味されている。だがこの『服従』の思想は、単なる現実からの逃避への勧めであると結論できるのか。決してそうではない。そのような見解は『服従』の置かれた歴史的なコンテクストを捨象した上に成り立つ空論であろう。

キリスト服従の裏面として描かれる「世からの分離、対立」をボンヘッファーが高らかに謳う際、そこで問われている「世」は、ナチの世を背景としているのである。ボンヘッファーは『服従』において世の普遍的な解明を目指すのではない。『服従』の「世」は、「一般的概念」でも「中立的概念」でもなく、「えりぬきの論争的概念」、『服従』の歴史的コンテクストとして存在した「ともに体験され耐えしのべられたこの世の出来事」を意味している<sup>(12)</sup>。『服従』のボンヘッファーの生きた現実において、世は、その悪しき様相をグロテスクに露呈する 1930 年代後半のドイツであった。1935 年にまとめ始められ、36 年中に完成を見たという『服従』の執筆期間を鑑みても<sup>(13)</sup>、ボンヘッファーの生きたドイツ、「世」は、神からの離反をいよいよ深めている。ボンヘッファーが牧師研修所に入り、『服従』を書き上げるまでのおよそ 2 年間のドイツをめぐる状況に限って見ても、ナチ政府は確固たる支配体制の下、その残虐さを内外にますます露わにすると共に、ドイツ福音主義教会に対する有効な法的措置を敷き、その強制力を強めていることが分かる。1935 年 9 月にはそれまでは官公吏他要職に限られたものであったユダヤ人追放を社会における徹底的な権利剥奪へと拡大するニュ

(12) R. シュトゥルンク著、大島かおり訳『キリストへの信従 ひとつの福音的挑発』新教出版社、1984 年、294、303 頁を参照。他、〈世〉の意味としては、「すべての現実を例外なく規定しようとしている、もろもろの事件、傾向、勢力、イデオロギー」、「全体主義的要求」などが考えられている。また『服従』の世は「つねに特定のものであり、同時に典型的なものなのだ」とも指摘されている。もちろんこのことと同時に、『服従』が世をどのように神学的概念として理解しているか、注意が払われねばならない。

(13) 森平太著「解説—あとがきに代えて」『キリストに従う』(ボンヘッファー選集 3) 新教出版社、1966 年、368 頁を参照。

ルンベルク法（生物学的・一人種主義的反ユダヤ主義の形式的合法化、ブラッハー）が公布されている<sup>(14)</sup>。続いて同月、教会への支配・干渉を直接に可能にする「ドイツ福音主義教会の保全に関する法律」が公布され、翌10月にはヒトラーの最初の軍事行動であり、その後の領土拡張政策の発端とも言えるラインラント進駐がある。緊迫した状況を理解するために更に言えば、当該の2年間にドイツ福音主義教会の抵抗組織であった告白教会のメンバーからは逮捕者が続出しているし、ナチ政府の揺さぶりによって政府の政策に対する批判姿勢をめぐり決定的な分裂が告白教会内に生じてしまっていた<sup>(15)</sup>。一方ではナチ政府の教会政策に対して明白な対決姿勢を堅持する立場があり、他方には政府と鋭く対立することを回避しつつ——悪しき世の側に近づく、あるいは世の介入を自らに許しつつ——告白教会としての在り方を確保しようとする立場があった<sup>(16)</sup>。当時のドイツ福音主義教会はドイツ的キリスト者に代表される帝国教会とバルメン・ダーレム会議の線に立つ告白教会に実質的に二分していたが、ボン・ヘッファー属する当の告白教会内においてもこの時点で「世をめぐって」致命的な分裂が生じ出していたのであり、その分裂は告白教会の姿勢を妥協的なものとするをも帰結していたのである<sup>(17)</sup>。

ここに『服従』の内的集中の問題を考えるならば、『服従』の展開するキリストへの内的な集中——世からの分離は、やはり「どのような時にもまして不可避の時になされた」のであり、それが「教会の主題になったことは正しいことであつた」<sup>(18)</sup>。世についてその「悪」と「罪」とを明言しつつこれを拒絶するボン・ヘッファーのキリスト『服従』は<sup>(19)</sup>、当時の歴史的状況への「根本的な神学的回答」<sup>(20)</sup>なのであり、「時代批判的・社会批判的に〔当時の〕この世を拒否する」契機を意味し（ペーターズ）<sup>(21)</sup>、研究史において問われてきた観点から一つの言い方をするならば、それは非政治的思想ではなく政治的な「ノンコンフォーミズム」（非同調主義、世の権威に対する服従

(14) 雨宮栄一著『ユダヤ人虐殺とドイツの教会』教文館、1987年、162頁を参照。括弧内の引用表現はK.D. ブラッハー著・山口定他訳『ドイツの独裁Ⅰ』岩波書店、1975年、458頁。

(15) より詳細な分裂の理由については雨宮の前掲書、181-182頁を参照。

(16) 前掲書、181頁を参照。

(17) 前掲書、163、180頁等を参照されたい。例えば「ニュルンベルク法」公布の直後に開催された古プロイセン合同教会告白会議などは象徴的な例である。

(18) E. ベートゲ著、雨宮栄一訳『ボン・ヘッファー伝（第3巻）』新教出版社、1974年、74頁。

(19) 『服従』における世理解は、基本的に、徹底的にその罪性を強調する「邪悪な世」である。ボン・ヘッファーはこれを十字架の光の下に既に骨抜きにされているもの、「影」として、終末論的に見出した。本稿でも取り上げられてはいるが、『服従』に展開されている神学的な世概念については、注(1)であげた拙論を参照。

(20) R. シュトゥルンク著、大島かおり訳『キリストへの信従 ひとつの福音的挑発』新教出版社、1984年、289頁。

(21) Timeo Rainer Peters, *Die Präsenz des Politischen in der Theologie Dietrich Bonhoeffers: Eine historische Untersuchung in systematischer Absicht* (= *Gesellschaft und Theologie, Syst. Beiträge* 18), München: Chr. Kaiser, 1976, pp. 57, 58.



拒否、宮田光雄・山崎和明)の次元をも包摂したのである<sup>(22)</sup>。

### 3. 『服従』における内的集中——キリストへの集中

ここまでの探求は、『服従』に展開される内的集中の意味を、「時代批判的・社会批判的に世を拒否する契機」、当時の世に対する「根本的な神学的回答」、「ノンコンフォーミズム」と見出した。『服従』の内的集中、キリストに従い——世から隔絶するという思惟は、単なる世からの隠遁を意味するものではなく、むしろ世の状況に対するボンヘッファーの応答であった。テキストをコンテキストに置くという方法と探求は『服従』に対する安易な否定と批判からその意味の弁証を一定程度成功させたと言っている。しかし、『服従』が内的集中を説くことに拠り「罪の世」からの分離ないし対峙を促したとするだけで、果たして理解として事足りるとはまだ言えないだろう。ここではまず『服従』における「内的集中」とはそもそも何を内容とするのかを改めて問いつつ、その思索の行き先を問題としよう。

『服従』においてその読者が当該の印象を受け取ったように、またミュラーやファイルに代表される多くの研究者が見出してきたように、『服従』は確かにまるで内的に集中し、世（現実）を無視するかと思われるほどに「キリストに」集中する。

「教会で交わされる対話の中で必然的に使われる日常のスローガンや戦いのスローガンの背後では、唯一の重要なもの、つまりイエスご自身に対する、より力強い探求と問いとが起こる。イエスはわれわれに何を言おうとされたのか。イエスは今日われわれに何を求めておられるのか。…われわれにとって最終的に重要なのは、あれこれの教会人が望んでいることは何かということではない。イエスが何を望んでおられるかということ、われわれは知りたいのである。…自分の意見や確信を説きすぎ、イエス・キリストご自身のことを説くことが少なすぎる…。われわれは聖書とイエス・キリストご自身の言葉と招きに帰って行こう」(21-22、一一三、傍点引用者)。

『服従』序文において、ボンヘッファーは自身の決定的な問題意識を開陳するが、そこに繰り返されるのはイエス・キリストの言葉、招き、わざをめぐるそれであって、そこには確かに「世」や「他者」に対する積極的な文言は主題化されない。『服従』を読み進めても見出されるのは、主として序言に沿うところのキリストへの集中であり、そこにおいて意味される世からの分離ないし世との対立の強調である。

(22) 宮田光雄著『ボンヘッファーを読む』岩波書店、1995年、77-113頁。中でも本稿の理解に関してはとりわけ86、109-110頁を参照。山崎和明著『ボンヘッファーの政治思想』新教出版社、2003年、103-163頁。特に110、115頁を参照。本稿のテーマに関して両者からは多くを学ばせて頂いた。

マルコ福音書の収税人アルファイの子レビ(マルコ 2:14)をめぐる釈義<sup>(23)</sup>において、ボンヘッファーは言っている。「服従の内容についてはどのようなことが言われるであろうか。『わたしに従って来なさい。わたしのあとを走ってきなさい!』。それですべてである」(46、三三、傍点は引用者による)。

『服従』に展開されるキリスト服従において、「世に対する参与」や、「世のための教会的実存」が付与される余地はえてして奪われている<sup>(24)</sup>。「キリスト教的な生活は世とは疎遠なもの」(164、一八一)であり、キリスト服従はただただ「イエス・キリストのみに固着すること以外の何ものでもない」(47、三四)。ボンヘッファーが『服従』において主として説くのは、恵みが「安価な」それではなく真に「高価であるゆえに」<sup>(25)</sup>、「本当にイエスと共に歩んで行くこと」(50、三九)である。すなわち、その恵み、赦し、愛の比類なき「高価さ」のゆえに、弟子は主に対する「従順のひたむき」(67、六二)を保持し、「戒め」の真実を認識しこれに生き<sup>(26)</sup>、「世とキリストと」に同時に従う「二心」ではなく「イエス・キリストのみに固着」(135、137-138、一四四、一四六)すること、それも部分的ではなく「単純に」<sup>(27)</sup>全人的な服従「イエスに対する全的な固着」(126、一三二)を「ひたすら」(155、一六八)生きることが、山上の垂訓を中心とした聖書釈義<sup>(28)</sup>を通し、「無条件的な」、「固着の排他性」(136、一四五)を伴って説かれるのである。

そして、既に指摘された通り、「キリストのみに」とボンヘッファーが強調するその背景には当時 1930 年代後半のドイツ「世」が置かれているのであり、「世に固着するような実存」は徹底的に退けられる。「服従する者は…キリストと世とを見ることはない。…彼は全くただキリストのみに服従する」(167、一八五)。「イエスの弟子たちのまっただ中で、絶えず繰り返して「教会と世との」分離は遂行されねばならない」(185、二〇九)<sup>(29)</sup>。

つまるところ『服従』の内的集中とは、聖書釈義<sup>(30)</sup>を通じたキリスト(の出来事)

(23) ここで「釈義」という言葉を用いることには議論が、もしかすると聖書学の分野からは異議が示されるかもしれない。ここに用いる語は現代の聖書学が扱う意味でのそれではなく、ボンヘッファーの神学的な、とりわけキリスト論的に集中する限定的な意味でのものである。この意味で本稿においては「釈義」という言葉を用いさせて頂きたい。

(24) もちろん既に私たちは、ここで言う「世」が神に反する悪しき世を限定的に、先鋭に意味していることを理解している。

(25) *DBW4*, pp.29-43. 邦訳文献(1966)では一三―三一頁。

(26) *DBW4*, pp.59-67. 邦訳文献(1966)では五一―六二頁。

(27) *DBW4*, pp.69-76. 邦訳文献(1966)では六三―七二頁。

(28) 「釈義」という語の使用、意味については、本稿の注(23)を参照。

(29) 括弧内の補足は引用者による。尚、引用したものと同様の文言は枚挙に暇がない。「この世を愛するならあなたは神を憎むし、神を愛するならこの世を憎む」(170、一八九)。「この世と教会の間に決定的な分離をなすべき時が来る時」(186、二一〇)。「イエスの言葉が教会とこの世との間の分離を遂行し」(189-190、二一四)。

(30) 本稿の注(23)を参照。

への集中なのである。主題の解明は主としてわたし（弟子）あるいは教会が「キリストに」従うことの真実をめぐって進められる。それが世からの徹底的な分離を意味されたとしても、先の研究から私たちは単なる教会内的な敬虔の問題としてこれを見出すことはないし、当時の世に対する先鋭な神学的応答と批判的射程をも汲むことができよう。しかし、私たちは尚ここに留まらず、その『服従』の内的集中—キリスト集中の行く先に留意、注視したいのである。

世から切り離されて、しかし弟子たちは「イエス・キリストが一步また一步とわたしに先立って進んで行かれるのを見、また…彼のみを見、一步また一步と彼に従っていく」（185、二〇八）<sup>(31)</sup>。ならば、観念ではなく具象の問題として弟子たちはどのような服従の様態を取ることを得ねばならず、得ることを許されるのか。ただキリストのみを見るところで、弟子たちが従うべく見出すキリストはどのような方であられるのか。『服従』において散見されるばかりで、それが必ずしも明確、体系的な言質を取ってはいないとしても、ボンヘッファーのキリスト集中は、その集中するところの事柄——キリストの実存（キリストのかたち）によってその行き先を確かに指示されている（安易な類比は許されないだろうが、H・ケスラーによる「伝統的教義学におけるベツレヘムとゴルゴダの間のく中間項」にあたるキリスト論の欠如）の指摘、あるいはJ・モルトマンが提案した「伝統的な神人キリスト論と十字架と贖罪のキリスト論との間に立つところの社会的人格としてのキリスト論」の主張と学び通ずるものは看取される）<sup>(32)</sup>。

「彼ら〔イエスに従う人たち〕は…他人の困窮、卑賤、罪責にあずかろうとする。彼らは微賤な人たち、病める者、みじめな境涯にある人たち、卑小な人たち、抑圧に悩む人たち、不正に苦しむ人たち、疎外されている人たち、苦しみと思い煩いに悩むすべてのものに対する、逆らうことのできない愛をいただいている」。なぜならば、「あわれみ深いお方が、自分の名誉を、汚辱におちいつている人々に贈り、その汚辱を身に負う」（106、一〇六）から<sup>(33)</sup>。「彼〔キリスト〕は人間の兄弟となり、人間の汚辱を十字架の死に至るまで負い給うた。これこそ、彼に固着する者のみがそれによって生きようとするイエスのあわれみである」（106、一〇六—一〇七）。

キリストに従うこと、それも——世からの分離をも帰結して——徹底的に排他的に従うことを『服従』は説く。しかし、その服従するところのキリストは単なる理念で

(31) 次のような文言もある。「弟子たちは彼〔キリスト〕の後に従って行く」（105、一〇五）。弟子たちは「単純にキリストを見つめてそれ以外のあれやこれやを見ることがない」（167、一八五）。

(32) 森野善右衛門著「キリスト告白の現代的展開—聖餐論とのかかわりを考える—」『時の徴』（第121号）、『時の徴』発行委員会、2009年9月、6-7頁を参照。

(33) 括弧内補足は引用者による。このような文言も続く。「彼〔キリスト〕は取税人や罪人のかたわらに身を置き、彼らと交わることから受けるはずかしめを喜んで担う」（106、一〇六）。



も抽象的精神でもなく、世とは異なった仕方では世に生き給う、見えるかたちを持ち給うたキリストであり、この方に対する服従（Nach-folge、あとに一つづくこと）が問題とされるのである。『服従』の内的集中は、それがキリストへの集中であるがゆえに奉仕の次元を獲得する。「われわれすべての兄弟となり給うたイエス・キリスト」への服従であるゆえに、『服従』は「兄弟から引き離れさせることを」弟子に見出さない（125、一三〇）。

#### 4. キリストへの集中から拡大する職域とその動態

『服従』における内的集中の意味探求のために、ここで『服従』における職務（職域）をめぐる理解を取り上げ、再構成を試みたい。『服従』の内的集中とはつまるところキリスト集中をその内容とすることを既に私たちは確認したし、その内的集中がキリストへの集中であるがゆえに、その行き先を外的奉仕に意味されることも理解した。しかしより厳密に、その「行き先」の実相はどのようなものであるのか。『服従』はもちろんキリスト者の職務の解明を主要課題とするものではないし、理解は著しく散見する。またそれは一見するに限っては「月並みな議論」にも思われるかもしれない。しかし、その全体を見渡すならば興味深い内容を得ることが出来るだろう<sup>(34)</sup>。世との分離、対立をこそ強調すると理解されてきた『服従』であるが、『服従』を、職務理解を鍵に読み出して行くなれば<sup>(35)</sup>、先ほど私たちがその糸口を見た『服従』の内的集中の意味は豊かに見出されるのである。

『服従』（第Ⅱ部）においてボンヘッファーは、教会の職務の場を、大きく見て宣教（Verkündigung）の場、秩序（Ordnung）の場、生活（Leben）の場に見る。宣教（Verkündigung）の場について語られる際、そこで考えられているのは、教会における全職務がそこに起源をもち、そこに終わると言われるところの「み言葉の説教」及び「洗礼と聖餐」であり、これは言わば職務の中心に位置される<sup>(36)</sup>。次いで、問題となるのが秩序（Ordnung）の場であり、ここで主として顧みられ、問われているのは、教会内における秩序と一致をめぐる混乱と、そこで見出されるべき教会における「正しい秩序と一致」、「秩序付け」である<sup>(37)</sup>。詳論はされないが、宣教の場ではみ言葉の説教は

(34) 残念ながらここで詳論の余地はないが、むしろ『服従』の職務理解も世理解と同様、ナチの世において生み出されたことを踏まえる時、その評価は十分な意味において可能となるものである。

(35) ここでは特に『服従』の後半、第Ⅱ部に集中して明らかにする。

(36) *DBW4*, pp.242, 248-249, 244. 邦訳文献（1966）では二七九、二八二、二八七頁。

(37) *DBW4*, p.247. 邦訳（1966）、二八五頁。詳論されていないが、教会における秩序をめぐる問題状況として、個々の教会のあり方・務め・構成の相違や、み言葉と聖礼典に関する理解の相違が例として考えられており（245-247、二八四-二八五）、ここにボンヘッファーは正しい秩序と一致の方向を指示するべく、「奉仕」を鍵概念として提示している。「教会の秩序は、神に起源と本質を持っている。そ

キリストの現臨に仕えるものとして、洗礼と聖餐はキリストとの交わりを比喻の問題としてではなく現実性を伴ったものとして説かれ、秩序の場ではその理解の鍵は奉仕者たるキリストに見出されている。何れの場においてもその理解の中心に座するのはキリストであるが、ここでの私たちの問題は、何よりも次ぐ生活の場にある。宣教の場から秩序の場までを基礎付けるキリスト集中は、続く生活の場をめぐる理解においても一貫して徹底され、教会の職務理解を独特に方向付ける。尚、本稿では余地なく今回は取り上げることが出来ないが、当時のルター派諸領邦教会においてはあくまで疑似ルター的な二王国論が支配的であったこと、すなわち「教会は、自己抑制を利かせ、自らを非政治的な私的な領域に留めて…。そのうえ教会の領域すらもナチの均制化（グライヒシャルトウンク）政策によって、ますます矮小化していかざるを得なくなつて」<sup>(38)</sup> いたことを鑑みる時、以下に見るボンヘッファーの「キリストへの内的な集中からの職務領域の展開」の意味はより確かに見出されよう。ボンヘッファーは教会の職務領域の問題を、とりわけ生活の場について以下のように展開していく。

A. 全体領域としての生活の場：教会は、ただその宣教と秩序のためだけではなく、その「えだえだの日々の生活のためにも」(248) 世における場所を要求する<sup>(39)</sup>。もしキリストに与って生きることをの意味が説教と聖餐に与ることに限定されるならば、それは「悪しく、まったく新約聖書的ではない制限」である。教会は、その職務を生活において、しかも、ただ生活というだけではなく、「全体的な生活」において担うのである(250)<sup>(40)</sup>。

ボンヘッファーは教会の職務を説教と聖礼典に見ることに留めず、教会の交わりに生きるキリスト者ひとりひとりの生活の場全てに見出す。なにゆえか、ここまでの『服従』の論理からして自明とも言えよう。キリストのゆえに、ボンヘッファーは職務の場所を生活全体に開くのである。「生活の全体は『キリストにおいて』受け入れられ

---

れはもちろん支配ではなく、奉仕の中に立っているのである」(245、二八四)。教会の秩序の起源と本質は神、キリストにあり、それゆえに、それは奉仕にある。教会の個々の務めや理解、あり方が、キリストの神への「奉仕のために秩序付けられているならば」、それはキリストの神にその起源と本質を帰するものである(246、二八四)。つまり、問題は、それぞれの教会の異なる務めや理解が奉仕のために定められている否かにある。異なっていることそれ自体が問題なのではなく——パウロにこうとも、アポロにこうとも(Ⅰコリ 1:12-13)——いずれにおいてもそこでただ一人の分かたれないキリストが証せられ、認められていることが問われるのである。そして、もしその意味で、教会の秩序が侵害を受けているならば、教会の秩序はキリストを起源・本質に持つのであるから、それによってキリストご自身が侵害を受けることになる(246、二八四—二八五)。キリストのからだ自身への侵害を意味するゆえに、状況によっては、教会は鍵の職務を執行し、愛のゆえに「あえて罪びととたもとを分かつ」(288、三三四) ことがあり得ると、更にボンヘッファーは語っている。この問題については『服従』第Ⅱ部の「聖徒」の項においてさらに詳論されているが、本論文の問題設定のゆえに、ここではこれ以上立ち入って論じることはしない。

(38) 山崎和明著『ボンヘッファーの政治思想』新教出版社、2003年、110頁より引用。あるいは雨宮栄一著『ユダヤ人虐殺とドイツの教会』教文館、1987年、182頁を参照。

(39) 邦訳(1966)、二八六頁。

(40) 前掲書、二八八—二八九頁。

ている」、それゆえに「肢体がからだを拒むことを許されたり、あるいはそうすることを欲するような生活の領域はない」(250) <sup>(41)</sup>。キリスト者は、キリスト——教会から「毎日の生活の中で、神の子と共に、神の子のために、全身を傾けて生きること」を求められるのであり、教会は個々のキリスト者の生活においてその生活の場を担う(248) <sup>(42)</sup>。それはキリストの全体的な関与に与るがゆえの、全体的な職務の生活である。

このように見出された生活全体における職務の場を、ボンヘッファーは、1つにはキリスト者相互の関係の問題として(B.)、1つにはキリスト者と人類全体との関係の問題として(C.)展開する。

B. 生活の場所におけるキリスト者相互の関係：「キリストのからだのえだの交わりの生活の場所は、全ての生活関係にわたり、洗礼を受けた者ひとりひとりに無条件的に開かれている。洗礼を受けた兄弟に礼拝に与ることを保証しながら、日々の生活においては交わりを拒み、その兄弟を悪く扱い、軽蔑する者は、キリストのからだそのものに対して罪がある。洗礼を受けた兄弟たちに救いの賜物を認めながら、地上的な生活の賜物を拒んだり、故意に地上的な困窮と苦境に陥らせる者は、救いの賜物を嘲り、欺く者となる」(250、二八九、傍点引用者)。

職務としての生活の場においては、キリスト者相互の全体的な交わりが託されており、教会内的な交わりへと理解を矮小化することは、キリストご自身への侵害をさえ意味される。このように言われるのは、先にも言われた通り、キリストの全的な関与に与る者に、職務として全的な生活の場が開かれるからと言えようが、このことをボンヘッファーはさらに積極的にこのように表現する。兄弟の生活の全体が「キリストによって…包まれている」(250) から <sup>(43)</sup>——即ち、「兄弟のあるところにキリストご自身のからだがあり、キリストのからだのあるところに、いつもキリストの教会もあり、そこにわたしもいなければならないからである」(252、二九一) <sup>(44)</sup>。

だから、キリスト者は相互の「兄弟愛」を生活全体において生きる。「彼らが共に生き、語りかつ行動するところに教会があり、そこで彼らはキリストのうちにあるのである」(252、二九〇―二九一)。

C. 生活の場所における人類全体との関係：キリストへの集中のうちに、キリスト者相互の「兄弟愛」が基礎付けられていたことは明らかにされた。そして『服従』(第Ⅱ部)は、内的に集中するところのキリストによって、その職務理解の視野をキリス

(41) 前掲書、二八八頁。

(42) 前掲書、二八六頁。

(43) 前掲書、二八八頁。

(44) ボンヘッファーは同様の言質を豊かに繰り返している。例えば次のような言葉がある。兄弟と助け合うことにおいて、キリスト者は『『肉においても、主にあっても』兄弟』であり、「キリストのからだにあってまさにひとつ」である(252、二九〇―二九一)。

ト者相互のみならず、人類全体との関わりへとついに広げられていく。

『服従』（第Ⅱ部）の叙述の最後に至り、ボンヘッファーはこのように続ける——「人となり給うた方、キリストに与るかぎり、われわれはキリストによって担われている全人類にあずかる。イエスの人間性のうちに、自分たちが受け入れられ、そして担われているのを知っているのであるから、今やわれわれの新しい人間性も、他者の困窮と罪を担うことにおいて存在する。人となり給うた方は、ご自身の弟子たちを全ての人間の兄弟とし給う。キリストが人となり給うたことにおいてあらわとなった神の『博愛』（テトス 3:4）は、地上において人間と呼ばれるすべての者に対するキリスト者の兄弟愛を基礎付ける。その上に全人類の罪と困窮が落ちかかり、ただひとりでそれを担い給うキリストのからだとならしめるのは、人となり給うた方の姿なのである」（301、三五二、傍点引用者）。

全人類をこそ志向するキリスト理解——キリストは「われわれのために」生きられ、同時に「人間である全ての者のために」生きられた——が<sup>(45)</sup>、キリストに従う弟子の生活を基礎付ける。キリストの「弟子たちの生活は、この〔キリストの〕かたちへと作り変えられていかねばならないのである」（301、三五二）<sup>(46)</sup>。

キリストに与ることにおいて、キリストがそのために生き給うところの存在が見失われることはなく、キリストに与りキリストとの交わりに生きることを許されながら、キリスト者相互の交わりに留まり、キリストがその憐れみを傾け給うところの存在を見出さないままではおれない。内的な——キリストへの集中は、世からの分離を促すばかりではなく、それが他ならぬキリストへの集中であるがゆえに外的奉仕の次元は確かに獲得され、そればかりか常に外的な奉仕の志向性を広く指示された。キリストとの交わりを意味する宣教と秩序の理解の後には、それらのみに職務を限定する理解に反しつつ職務としての生活が語られ、そしてそこでは生活の特定の部分に職務を限定する理解に反しつつ生活全体への広がりが見出され、さらに生活全体の広がりの中においてもキリスト者相互の関係に職域を限定する理解にとどまることなく、人類全体との関係へとますますその広さは示されるのである。それら何れの「広がり」の契機も、キリストの実存の全体性、神の『『博愛』（テトス 3:4）の完全な広がり』（24、六）への集中、呼応であることが見出される。ボンヘッファーはその内的集中の徹底のゆえに、私的な内的集中に留まることなく、外的奉仕の広がりをいよいよ促されているのである。

(45) DBW4, pp.228, 235, 301. 邦訳(1966)では二六三、二七三、三五一頁。神の憐れみは「キリストにおいて、全人類を自ら引き受け、担い給うた」（228、二六三）ともある。

(46) 括弧内補足は引用者による。

## おわりに

ここに本稿は、研究史において課題とされてきた『服従』の内的集中の意味を新たに確認する。『服従』の内的な集中、すなわち世を拒絶する排他的なキリスト集中は、当時の〈世〉に対する根本的な神学的回答、この世批判と拒否の契機であるばかりではなく、積極的に、弁証法的とも称せられるような「外的な奉仕」を意味している。これまでの研究が歴史的コンテクストとの対照から『服従』の「内的集中—この世の拒否—この世への応答」の意味を見出してきたとすれば、本稿は『服従』の内的集中の論理を追うことによってこれを補充した。また以前にも述べているが、ネガティブな世理解が主として支配的とされる『服従』が、その第Ⅱ部においてどこか新しい響きを持っていることもやはり注目される。ボンヘッファーが「世ではなくキリスト」と主張し、「世ではなくキリストへの固着」を繰り返し強調するところにおいて——ボンヘッファーが内的集中を徹底すればするほどに——彼は世に向かうための新しい課題、新しい次元へと眼差しを向けるよう「外へと」強いられ促され、いわんやそれを許されていたのであり、本稿の課題を越えて言えば、それは『服従』との断絶を孕むとも言われることのある『倫理』への道程を豊かに方向付けているように思われない。

本稿が主題に関して残した課題の多いことも最後に述べておかねばならないだろう。当時の歴史的コンテクストや同時代のボンヘッファーの他の証言と併せた丁寧な探求、あるいは当時の神学思想との関わりや影響関係、『服従』前後のボンヘッファーの思惟・歩みとの連続性、非連続性といった問題への取り組みは依然残されており、これらは今後の課題である。